

清水和裕『イスラーム史のなかの奴隷』(世界史リブレット 101) 山川出版社 2015年 91頁

本書の分量は、原稿用紙で約120枚ほどであろうか。しかし、この短い分量のなかにいくつもの重要な指摘や鋭い知見、興味深い事実が詰められている。著者である清水和裕については、改めて紹介をする必要もないだろうが、その主著『軍事奴隷・官僚・民衆——アッバース朝解体期のイラク社会』(山川出版社、2005)が刊行されたのちは、とりわけアッバース朝期を中心に広く活躍している九州大学の教授である。

イスラーム社会における奴隷は、日本の学界においても決して馴染みのない問題ではない。むしろ、佐藤次高『マムルーク——異教の世界からきたイスラームの支配者たち』(東京大学出版会、1991)を筆頭に、この問題に関連する著作や論文はこれまで幾つも出版されてきた。しかし、意外なことに、このテーマを広く概観できるような日本語の著作は本書以前には存在しなかった。本書はマムルークやグラーム、イエニチェリなどをきっかけにイスラーム社会の歴史に関心を持つ読者には、まさにうってつけの一冊となるであろう。なぜならば、類書がなかったばかりでなく、本書は、奴隷制に焦点を合わせながら、その背後にそれと分かちがたく結ばれていたイスラーム社会そのものを照射しているからである。以下では本書を特に奴隷やそれに関連する研究の最近の動向を念頭に置きながら評してみたい。

まず本書の内容をごく簡単に紹介するところから始めたい。「イスラーム社会の歴史と奴隷制」という見出しの付けられたイントロダクションでは、奴隷制から抑圧と支配、保護と融和の双方を生み出し、それを不可欠な社会制度として組み込んできた過去のイスラーム社会を描くという本書の目的が明らかにされる。続く「奴隷とイスラーム社会」では、イスラーム法における奴隷の規定を片方で、現実社会における実践をもう片方に見据えながら、奴隷解放、「ウンム・ワラド」や「ムカータブ」などの事例が紹介される。それらを通して、主人と(解放)奴隷のあいだの一種の疑似血縁関係や、家長と奴隷との関係と家長と家族成員との関係との強い類似が論じられ、またイスラーム社会に生きる人びと全体が、「完全なモノ」としての奴隷とあらゆる社会的制約を持たないフィクションとしての「自由人」とのあいだのどこかに位置していたというイスラーム社会そのものへの指摘がなされる(24頁)。「アラブの拡大と異民族奴隷」では、アラブ社会に焦点が当てられる。ジャーヒリヤ時代からさかのぼり、「血統」を重視したアラブ社会で大征服によって混血が進み、アラブ血統主義からイスラーム中心主義へと転換していく流れが叙述される。特に象徴的なのは、奴隷の血統を卑しいものとするアラブ血統主義以来の言説が継続する一方で、イスラームの徳の前では奴隷の血は問題にならないとする見方が登場するところにある。これを引き継ぐ「宮廷の奴隷たち」では、奴隷の血統を引き継ぐアッバース朝カリフの事例や奴隷出身者でありながら要職に就いた人物などが紹介され、イスラーム中心主義が浸透していく様子を読者は具体的なイメージを以って理解できるだろう。これに伴い、君主の私的空間であるハレムは奴隷や異民族出身者の最も力を発揮する場となっていき、さらには、マムルークやグラームのように、幼少期から為政者と個人的な紐帯を築いた奴隷が政権の中核に位置する支配層にもなっていくのである。ただし、そうした奴隷の在り方だけがイスラーム社会における奴隷の姿でないことは、最後の「搾取される奴隷」で論じられる。とりわけ、人種によっては、奴隷は侮蔑の対象ともなった。同時代の「科学」によって裏付けられた人種の特性は、職務とも関連し、ひいてはその奴隷の社会的位置をも規定していたのである。この章の後半部分は、本書の結論にもなっているが、そこでは大きく二点が指摘される。個々の奴隷がどのような人種、性別であると判断されたか、そして、どのような主人に購入されたかという二つの要因が組み合わさって、その奴隷の境遇の違いが生まれると著者は指摘する。特に後者については、奴隷はイエを構成する(未成熟な)一員として迎えられ、家長にとって、奴隷は他の家族成員と同じように保護する対象であると同時に、教育・矯正し、また、支配する対象でもあった。したがって、家長との紐帯は強固である一方、他の家族成員同様に、自助性は少なく、自決力を発揮する場は極めて限られていた。また、奴隷を未成熟な家族成員として受け入れ、教育を施し、成熟させることは、イスラーム社会における異教徒などの他者を同化するというより大きな社会プロセスと連動していた。具体的には、教育を受け、成熟した奴隷は解放され、自由人としてイスラーム社会の一成員となることが見込まれていたのである。

このように本書は非常にコンパクトでありながら、イスラーム社会における奴隷とホスト社会との関係

を、著者の深い知見を基礎にして、極めて克明に論述している良書である。以下では、奴隷研究の観点から、幾つかの注目すべき点を挙げていきたい。まず、奴隷の定義に関わる著者の態度である。著者も述べるように、人文科学においては、用語の定義が議論をする際のもっとも基礎的な作業であることに異論はないだろう。しかし、著者はあえてそれを回避する。本書の立場は「奴隷ではないが『奴隷に近い人々』を開放系のなかで、『奴隷』とともに扱う」(8頁)というものである。このような立場をとる理由として挙げられているのが、マルクス主義史観と発展段階論の軋からの解放である。著者も述べるように、奴隷制が発展段階のひとつの指標として存在した歴史観においては、奴隷の定義は必要不可欠であった。しかし、そうした呪縛から解き放された現在にあっては、むしろ、定義に収まりきらない多様性が時間と空間のマトリクスのなかで存在することに気が付かされるのである。この点は、多様な史料を丹念に読み込んできた著者ならではの重い指摘である。

たしかにイスラーム法においては、「奴隷」と「自由人」は区別されるのだが、現実には両者の境界にはっきりとした一本の線が引かれているのではなく、それは極めて広範なグレイゾーンでしかない。そうしたグレイゾーンも視野に収めることでイスラーム社会を逆照射したいというのが定義を慎重に避ける著者の意図であろう。ここでいうグレイゾーンの具体的な事例を本書に即して挙げるとすれば、本書17頁以降で述べられている奴隷解放、「ウンム・ワラド」や「ムカータブ」であろう。より端的に一例を挙げれば、イスラーム法は解放奴隷に自由身分を与える一方で、元の主人に奉仕する義務も同時に負わせていたのである。著者のこのような奴隷の定義に対する姿勢に関連して想起されるのが、フランス高等研究院の研究者で労働史を中心に活発な研究活動を展開するアレッサンドロ・スタンティアニの最近の研究である。たとえば、2013年に自身が編集した論文集の序章では、自由労働と強制労働との関係を固定的に捉えるのではなく、ある社会において双方の境界がある線で引かれたことそのもの、そしてそれが実践されたことの背景を問うことの重要性を指摘している[Staniziani 2013: 2]。大西洋世界の事例研究を大きな核として構築されてきた奴隷・奴隷制・奴隷交易イメージは、インド洋をはじめとする研究対象の多極化によってこんにち大きな揺らぎをみせている。そのような揺らぎは、往々にして従来のイメージを覆すべく提示された別のイメージによってもたらされる場合が多い。インド洋の奴隷研究の大きな貢献は、現状ではそこにある。しかし、むしろ、清水やスタンティアニのように、積極的に定義をしないという方法もあるはずである。実際に、本書では、奴隷とともに自由民と奴隷との間に横たわるグレイゾーンにも光が当てられることで、逆に自由民の姿も、また、イスラーム社会そのものの柔軟な側面も浮かび上がっている。

次に、本書を貫く著者の論点として挙げるべきが、奴隷とイエとの関係性である。このイエについては本書では詳細に説明がされていないが、清水の『軍事奴隷・官僚・民衆』では中世アラブ世界のイエが解説されており、それは基本的には拡大家族で、家長を中心とし、その直系の息子たちとその家族に加えて、家長の兄弟とその家族などの血縁集団、さらには彼らと従属関係にある奴隷など幅広い集団から構成されるものであった[清水 2005: 67]。このイエに、未成熟なまさに「子ども」として奴隷は組み込まれ、一人前の「おとな」として育てられていくのである。近年、議論が盛んになっているインド洋の奴隷制のひとつの特色として、たとえば、グウィン・キャンベルは、同化(assimilation)を挙げ、その程度によって、奴隷は社会的地位の上昇が可能であるとされる(たとえば、[Campbell 2004, xvii-xviii])。しかし、その具体的なプロセスについては、これまでほとんど明らかにされていない。本書で示されたイエを媒介とするこの「奴隷=子ども論」ともいえる見方は、イスラーム社会における同化のプロセスをきわめて明快に説明する一方、そこに孕む問題をも浮き彫りにする。すなわち、本書の結論に相当する部分で著者が論じているように、奴隷のホスト社会への同化は、イスラーム社会の場合、より直接的には主人との個人的紐帯のもとに行われるのであり、同化した後に奴隷が獲得できる社会的地位は、主人の社会的地位に強く束縛されてしまうのである。ただし、著者が繰り返しているように、個人への隷属性の強さはイスラーム社会においては奴隷に限られたことではなかった。ここにも、私たちは自由人と奴隷との連続性を確認することができるだろう。

これらを踏まえたうえで、一点だけ疑問を提示したい。本書が示すように、奴隷や奴隷制はイスラーム社会を成立させるうえで必要不可欠な重要な要素であったのならば、なぜ、奴隷制廃止はたやすく廃止に至ったのだろうか。「たやすく」というのは語弊があるかもしれない。しかし、それこそジャーヒリーヤ時代から連綿と存在してきた奴隷制の歴史を振り返るならば、廃止の動きが現実化してから、現実には廃止が各地で

宣言されるまでの時間は極めて短いと言わざるを得ない。これが如何にして可能になったのかは、本書で奴隷制とイスラーム社会との不可分な関係を理解すればするほどに生じる疑問である。

ただ、この疑問は本書に対する疑問というよりも、本書から派生した疑問であるといえよう。そこで、願わくは、本書の増補版がほしいところである。著者には、学術書の体裁で、よりじっくりと奴隷制とイスラーム社会との相互関係を論じていただきたい。

<参考文献>

清水和裕 2005『軍事奴隷・官僚・民衆——アッバース朝解体期のイラク社会』山川出版社。

Campbell, Gwyn. 2004. "Introduction," in Gwyn Campbell (ed.), *Structure of Slavery in Indian Ocean Africa and Asia*, Portland: Franc Cass, pp. vii–xxxii.

Stanziani, Alessandro. 2013. "Labour, Coercion, and Economic Growth in Eurasia, Seventeenth-Early Twentieth Centuries," in Alessandro Stanziani (ed.), *Labour, Coercion, and Economic Growth in Eurasia, 17th-20th Centuries*, Leiden: Brill, pp. 1–26.

(鈴木 英明 長崎大学多文化社会学部准教授)

高橋圭『スーフィー教団——民衆イスラームの伝統と再生』(イスラームを知る 16) 山川出版社 2014年 106頁

神に至る道を探求する思想運動たるスーフィズム、教団員が神に至る道を進むべく共に宗教実践に励む集団たるタリーカ(スーフィー教団)、そして、人々が神に選ばれし聖者に願望の成就を託す実践たる聖者崇敬。これらは、イスラーム世界において、超越的で一なる神と世界内存在である人間とが社会の中でいかに結びつこうとしているのかを考察する上で重要な鍵となる。

本書は、上記3つの中でもとくにスーフィー教団に焦点を当て、それがムスリム社会において有している意義と役割について、その誕生から現代に至るまでを時系列的に追いながら解説した入門書である。

日本語で読むことのできるスーフィズムおよびタリーカ(スーフィー教団)の歴史をまとめた文献としては、東長による各論攷[東長 1993, 2010a, 2010b]やザルコンヌによる概説書[ザルコンヌ 2011]などがあるものの、まだまだ寡少であると言わざるを得ない。また、副題にある民衆イスラームとの関連で言えば、本書に先行して出版された『民衆のイスラーム——スーフィー・聖者・精霊の世界』[赤堀編 2008]では、聖者崇敬や聖遺物信仰などを中心に豊富な事例が紹介されているものの、タリーカを真正面から扱っている章はない。そのため、本書は既に紹介されている民衆イスラームにかんする事例を補完し、「民衆イスラーム」像の外延を広げる役割を担っている。以上を踏まえると、本書はスーフィズム(とりわけ、スーフィー教団)と民衆イスラームの両者を一挙に把握できる、まさに一石二鳥の書と言えよう。

本書は、「民衆のイスラーム」と題する前書きに加え、以下の5章からなる。

- 第1章 スーフィー教団の成立
- 第2章 ムスリム社会のなかのスーフィー教団
- 第3章 イスラーム改革運動とスーフィー教団批判
- 第4章 近代国家とスーフィー教団
- 第5章 現代スーフィー教団の再生

第1章では、スーフィズムの誕生からスーフィー教団の成立までを、とくに9世紀半ばから13世紀に焦点を当てて概観している。

スーフィズムはその誕生当初からウラマーによる批判を受けることも少なくなかったが、11・12世紀頃には宗教諸学の一分野としてスンナ派正統教義の中に確たる地位を占めるに至る。そして、続く12世紀から